クオリア構造の要素を用いた名詞句「NP_1のNP_2」の意味分類

羅　　漢

キーワード：飽和名詞、非飽和名詞、飽和性、辞書的知識、百科事典的知識

要旨

本稿は、西山(2003)の分類を出発点とし、文脈を想定せずに具体的な意味解釈を有する名詞句「NP_1のNP_2」を対象に、クオリア構造の観点から分類・記述しようとするものである。結論として、対象名詞句は主名詞NP_2が飽和名詞であるが、その名詞句が持つ具体的な意味解釈が主名詞NP_2の辞書的意味と百科事典的意味から生じるものであること、また、NP_1とNP_2との意味関係をクオリア構造の形式クオリア、構成クオリア、目的クオリア、主体クオリアに対応させる形で整理できることを示した。

1. はじめに

日本語では、二つの名詞(句)を連体助詞「の」で繋ぎ、「NP_1のNP_2」という形の名詞句を構成できる。このような名詞句におけるNP_1とNP_2の意味関係は多様であり、従来、色々な分類がなされている。例えば、「NP_1のNP_2」の意味・用法を階層的または平面的に列挙し、分類するというやり方がある(鈴木1978－1979c、増淵1981)。また、NP_1をNP_2に関連するキーワードと見なし、「NP_1のNP_2」が文脈の中で多様な用法を獲得すると考える立場も見られる(大島1998、2010)。

しかし、前者は、文脈次第で多様な解釈を許す名詞句を分類しきれないという問題を、後者は、文脈を想定せずに具体的な意味解釈を持つ名詞句を説明できないという問題を抱えている。例えば、「太郎の墓」という名詞句は、文脈次第で「太郎が遺跡発掘で発見した墓」や「(墓石業者である)太郎が作った墓」のように多様な意味に解釈されうるが、特に文脈を想定しない場合「太郎の遺体や遺骨を葬ってある所」という具体的な意味に理解されるものである。

このように、文脈の有無によって全体の意味が具体的な解釈から自由な解釈に変化しうる名詞句は、(1)のように、ほかにも多数見られる。

(1)花子のキスマーク、高層ビルの影、風邪の薬、鍋の蓋、かぼちゃの花、狐の化け物、お寺のパンフレットなど

本稿では、(1)のような名詞句「NP_1のNP_2」を対象に、主名詞NP_2の意味特徴を中心に考察することを目的とする。なお、考察にあたっては、意味論と語用論を明確に区別した立場から扱う、西山(2003)の分類を出発点とする。

2. 西山(2003)の分類

西山(2003:6－58)は、「NP_1のNP_2」という構造の名詞句を、NP_1とNP_2の意味関係から以下の五つのタイプに大別した。

(2)a. タイプA:NP_1と関係Rを有するNP_2
　　例:山田先生の本、洋子の首飾り、ピアノの音
b. タイプB:NP_1デアルNP_2
　　例:コレラ患者の学生、看護師の洋子、病気の父
c. タイプC:時間領域NP_1における、NP_2の指示対象の断片の固定
　　例:着物を着た時の母、大正末期の東京
d. タイプD:非飽和名詞NP_2とそのパラメータの値NP_1
　　例:この芝居の主役、太郎の妹、この小説の作者
e. タイプE:行為名詞NP_2と項NP_1
　　例:物理学の研究、この町の破壊、田中先生の忠告

この分類のうち、タイプB、タイプC、タイプEは本稿で検討する名詞句と関与しない。なぜなら、(1)には、「の」を「である」に置き換えられるものや時間領域、行為名詞(動名詞)に相当するものが含まれていないからである。この理由により、以下ではタイプAとタイプDのみを取り上げて紹介することにする。

まず、タイプAについては、「その言語的意味は、あくまで〈NP_1と関係Rを有するNP_2〉というものであり、スロットRの具体的な値はコンテクストのなかで語用論的に補充されるべきものである(西山2003:16－17)」と説明されている。例えば、「山田先生の本」は、意味論(言語的意味)のレベルでは「山田先生と関係Rを有する本」という抽象的な意味しか持たないが、実際の発話状況の中でその関係Rを補うことに

よって、「山田先生が書いた本」や「山田先生が持っている本」、「山田先生が借りた本」など多様な意味に解釈されうる。

次に、タイプDであるが、主名詞NP_2が非飽和名詞であるという点でほかのタイプから区別されている。非飽和名詞とは、「「Xの」というパラメータの値が定まらないかぎり、それ単独では外延(extension)を決めることができず、意味的に充足していない名詞(西山2003:33)」のことである。それと対をなす概念は、飽和名詞と呼ばれ、「それ自体で意味が完結しており、ある対象がその名詞の属性を満たすかどうかを自律的に定めることができる名詞(西山2012:101)」と定義されている。簡単に言えば、飽和名詞は、「パソコン」「ネコ」「箱」などのように、単独で事物の種類を規定できる名詞である。対して、非飽和名詞は、「主役」「妹」「作者」のように、指示対象を同定するのに「何の」「誰の」「どれの」などの要素を補わなければならない名詞である。例えば、ある人に向けて、「あなたは作者ですか」と聞いても、答えようがない。その人が作者であるかどうかは、どの特定の小説(作品)を問題にしているかを定めない限り、定かではないからである。

さて、(1)の名詞句はタイプAとタイプDのどちらに属するのか、それとも新しいタイプとして分類されるべきだろうか。以下では、第3節でタイプDとの比較を、第4節でタイプAとの比較を行うことで、(1)の分類に関わる問題を検討していく。

3. 主名詞NP_2の飽和性テスト

前述のように、タイプDは主名詞NP_2が非飽和名詞であることで特徴づけられるものである。したがって、(1)の名詞句がタイプDであるかどうかを確かめるには、その主名詞NP_2の飽和性をテストすれば良いのである。名詞の飽和性を調べるテストはいくつあるが、ここで山泉(2013:12－13)とNishiyama (2016:651－652)によって提案されたものを使うことにする。

このテストを紹介するにあたって、まず意味の近い飽和名詞と非飽和名詞のペアを比べてみよう。「作家」は単独で職業を表すことができる飽和名詞である。ある人が作家であるかどうかを判断するには、その人が書いた作品を特定する必要はない。したがって、Aという本を書いた人とBという本を書いた人をまとめて「作家2名」あるいは「2名の作家」と言うことができる。これとは対照的に、「作者」は、「源氏物語の作者」のように、意味解釈の際に作品名を必須の要素とする非飽和名詞である。そのため、ある人が作者と言えるかどうかを問題にするには、その人が書いた作品の名前を

予め確定しなければならないのである。よって、Aという本の作者とBという本の作者がそれぞれ別の外延を作ることから、両者をまとめて「作者2名」あるいは「2名の作者」と言うのは不自然である。

以上の比較からわかるように、ここで使う飽和性テストは、飽和名詞と非飽和名詞が数量詞による修飾を受ける際の適格性の違いを利用したものである[1]。つまり、数量詞による修飾を受けることが可能な名詞は飽和名詞であり、それが不可能な名詞は非飽和名詞であるということである。さて、問題となる(1)の名詞句の主名詞NP_2をこのテストで検証してみよう。

(3)そう声がしたかと思うと、何も見えない真っ白な空の上の方で突如雷鳴が鳴り響き、霧の中に二つの影が浮かんだ。一つは犬の頭をもつ人の姿。もう一つは、女性のものだ。

(BCCWJ、ゆうきりん『オーパーツ・ラブSP』(PB29_00459))

(4)薬局で二種類の薬を渡された。一つは風邪の薬で、もう一つは頭痛の薬だ。

(作例)

(3)では、下線部からわかるように、書き手に見えた「影」に「犬の頭をもつ人」のものがあるほかに、もう一つ「女性のもの」が存在する。それぞれの影を作った主体が異なるにもかかわらず、両者を併せて「二つの影」と言うことができる。このことは、「影」という名詞が、数量詞による修飾を受けることが可能で、飽和名詞である、ということを示唆している。また、(4)の「薬」も同様に、「風邪の薬」と「頭痛の薬」を併せて「二種類の薬」と言えることから、飽和名詞のグループに分類される。このほかに、「キスマーク」「並盛」「立場」なども、「二つのキスマーク」「並盛二つ」「二つの立場」が言えるように、飽和名詞であることがわかる。

このように、(1)の名詞句の主名詞NP_2を飽和性テストで検証することで、そのNP_2が非飽和名詞であることが明らかになった。また、タイプDのNP_2が非飽和名詞であるため、(1)の名詞句をタイプDから区別することができる。では、(1)の名詞句はタイプAの分類と見なして良いのであろうか。結論から言えば、(1)はタイプAとも異なる性質を帯びていると言える。この点を明らかにするために、次節では(1)の名詞句をタイプAと比較し、両者の差異をもたらす要因を探る。

4.(1)の特殊性について

(1)の名詞句は、本稿の冒頭で述べたように、文脈次第で多様な解釈を許すものである。例えば、「太郎の墓」は、適切な文脈が揃えれば、「太郎が遺跡発掘で発見した墓」にも「(墓石業者である)太郎が作った墓」にも解釈されうる。この点に関して、タイプAも同様である。例えば、「山田先生の本」は文脈次第で「山田先生が書いた本」「山田先生が借りた本」など多様な意味に解釈される。

しかし一方で、特定の文脈を想定しない場合、(1)の名詞句とタイプAとは解釈の仕方が異なるようである。タイプAは文脈なしの場合「NP_1と関係Rを有するNP_2」という抽象的な意味しか持たないのに対して、(1)の名詞句は具体的な意味を持っている。例えば、「山田先生の本」は、文脈を想定せずに「山田先生と関係Rを有する本」という意味にしか解釈されないが、「太郎の墓」は、文脈を想定しなくても、「太郎の遺体や遺骨を葬ってある所」という具体的な解釈を持っている。では、この種の具体的な意味解釈はどこから生じるものだろうか。

本稿では、それが(1)の名詞句の主名詞NP_2の意味から生じるものと考える。例えば、「太郎の墓」では、NP_2「墓」が「遺体や遺骨を葬ってある所(『日本語国語大辞典』第二版)」と規定され、名詞句全体も文脈なしで「太郎の遺体や遺骨を葬ってある所」という意味に解釈される。また、「花子のキスマーク」「高層ビルの影」なども、それぞれの主名詞NP_2が「強くキスをされたために、はだのその部分にできた軽いあざ[2]」(『日本語国語大辞典』第二版)」や「光を吸収したことによってうつし出される物体の輪郭(『日本語国語大辞典』第二版)」などの意味を有するため、名詞句全体も文脈を想定せずに「花子に強くキスをされたために、はだのその部分にできた軽いあざ」や「高層ビルが光を吸収したことによってうつし出される(高層ビルの)輪郭」といった具体的な意味に解釈されるのである。

ただし、ここで注意すべきは、(1)の名詞句が有する具体的な解釈をもたらす主名詞NP_2の意味が、すべて辞書的知識(言語的知識)に属するのではなく、その中に百科事典的知識(語用論的知識)であるものも存在するという点である。辞書的知識と百科事典的知識との違いは、以下のように規定されている。

(5) a. 辞書的知識=言葉(語彙)を用いて理解する上で必要な知識であり、すべての話者について成立する。

b. 百科事典的知識=その語が表す指示対象に関する知識であり、個々の話者や

文化、社会において100%成立するとは限らない。

（影山2005：67）

この規定からも明らかなように、辞書的知識は文化や社会通念を問わずに万人に共通するものであるのに対して、百科事典的知識は文化ないし個人的な経験の違いによって人々に共有されている程度の差が甚だしいものである。

辞書的知識に属するものとして、上述の「墓」「キスマーク」「影」などが挙げられる。「墓」について言えば、どんな文化や社会通念を有する人にとっても、「誰かの遺体や遺骨を葬ってある所」というのが共通に理解される意味であろう。また、「キスマーク」や「影」も指示対象の形こそ異なれ、「誰かにキスされた後に残ったあざ」、「何かが光を吸収したことによってうつし出される輪郭」といった知識との関連で理解されることがすべての話者について成立すると思われる。

一方、百科事典的知識に属するものには、大きく分けて文化的な違いによるものと個人的な経験の違いによるものがある。まず、文化的な違いによるものとして「化け物」という語が挙げられる。日本語話者にとって「化け物」という語を正確に理解するには、「動物などが人間の姿を取って現われる」という「化け物」が表す指示対象に関する知識が必要である。しかし、日本文化を共有していない人々はこの知識を持っているとは限らない。彼らは「狐の化け物」という名詞句を理解する際に、文脈なしで「狐が人間の姿を取って現われるもの」という意味で解釈することは難しいと予測される。この場合の「狐が化けたもの」という意味は、「狐の形をしている化け物」や「狐に化けたもの」などの意味とともに文脈を参照したうえでの解釈となるわけである。

次に、個人的な経験の違いによるものには、「薬」という語がある。「薬」が指す指示対象には、「病気やケガを治すもの」や「病気などを防ぐもの」、「ある症状が生じるように仕向けるもの」などが存在するが、大多数の人が「薬」を「病気やケガを治すもの」として理解している。したがって、「風邪の薬」と言えば、文脈を想定せずに「風邪を治す薬」という意味に直ちに解釈できるのである。それに対して、殆ど病気にならず、専ら健康促進のために薬を飲む人にとっては、「風邪を治す薬」の代わりに、「風邪を防ぐ薬」を「風邪の薬」の第一義的な意味解釈として理解するかもしれない。

以上、(1)の名詞句が文脈なしで持っている具体的な意味解釈をもたらす要因について分析してきた。その結果、この種の意味解釈が主名詞NP_2の辞書的知識と百科事典的知識から生じるものであることを明らかにした。また、以上の分析から、(1)の名

詞句がタイプAとも異なることを示した。そこで次節からは、クオリア構造の考え方を紹介し、(1)の名詞句の分類に応用することを試みる。

5. クオリア構造による(1)の分類

クオリア構造(qualia structure)はPustejovsky (1995)によって提案された語彙表示であり、(6)のように語の性質を四つの要素に分けている。

(6)クオリア構造(Pustejovsky1995:76)

a. 形式クオリア:ある領域の中で、そのものとほかのものを区別する属性(人工物か自然物か、個物か出来事か、男か女かといった違い)

b. 構成クオリア:あるものと、それを構成する部分との関係(材料、材質、内容、~の一部分(part of x)といった性質)

c. 目的クオリア:そのものが本来的に意図された目的や機能

d. 主体クオリア:そのもの発生に関わることがら(その物を生み出す行為や原因、成り立ち、出処)

ここで示されている四つのクオリアは、小野(2005:23)で「語彙項目に関連した、その語をもっともよく説明する属性や事象の集合[3]」だけでなく、それらの表示に基づいて意味が合成的に生成される仕組みを説明できるものでもあると述べられている。本稿が対象とする(1)の名詞句が有する具体的な解釈も主名詞NP_2と関わる属性や事象の集合から合成的に生成される仕組みと解せるため、四つのクオリアによって分析することが可能である。

また、クオリア構造が言語の知識と実世界の知識を連続体として捉える立場を取り、「百科事典的情報を語の辞書的意味に取り込もうとする試みである(辻編2013:300)」ということも、クオリア構造を用いる一つの理由となる。なぜなら、(1)の名詞句に具体的な意味解釈をもたらすNP_2の意味にも辞書的意味と百科事典的意味との両方が存在するからである。ただし、ここで注意したいのは、クオリア構造の標準的な利用方法は、ある語をよく説明する種々の属性・事象を抽出し、その語の内部に構造を配置するというものであるのに対して、本稿では、名詞句のNP_1とNP_2を主名詞NP_2のクオリア構造の内部に配置する形で利用するという点である[4]。

以下、クオリア構造の順に従って、(1)の名詞句を分類した結果を表1に示す。

表1　クオリア構造の要素を用いた(1)に含まれる名詞句の分類[5]

形式クオリア	NP_1がNP_2の上位カテゴリー	NP_1がNP_2の下位カテゴリー
	シェークのバニラ、牛丼の並盛、握りの特上、バランタインの17年もの、カローラの1500CCなど	チューリップの花、松の木、東京の町、君が代の歌、クリスマスの日など 5キロの重さ、1ミリの長さ、ユーザー保護の目的、恐怖の感情、拒否の態度、イ・ロ・ハの順、主語の概念、反対の立場、税理士の資格など[6]
構成クオリア	NP_1がNP_2の材料、材質、内容、または構成部分	NP_1がNP_2という材料、材質、内容、または構成部分からできた全体
	わらの屋根、竹のお椀、ゴムの栓、鍋のつみれ、野菜の天ぷら、タラのかまぼこ、諺の辞典など 花瓶の絵、結婚の話、バッハの伝記、バットマンの映画、国際化の宣言、スト決行の声明など[7] きのこの山、畳の部屋、フィルターのたばこ、メガネの学生、スーツの男性、車いすの人など[8]	家の玄関、研究室の窓、大阪城の天守閣、病院の診療室、博士論文の目次、自転車のペダル、万年筆のインク、コピー機のカートリッジ、ギターの弦、浴衣の帯、爬虫類のDNA、象の鼻、かぼちゃの花、大阪の町並み、コップの半分、試験の第一問など
目的クオリア	NP_1がNP_2の本来的に意図された目的や機能に関わることがら	
	英語の先生、酒の瓶、CDのケース、布団のカバー、風邪の薬、とんかつのソース、そばのつゆ、年金の証書、サッカーのユニフォーム、カレーのスプーン、言語学の入門書、お寺のパンフレット、徳川家の人質、太郎の墓など	
主体クオリア	NP_1がNP_2の発生に関わることがら	
	彼女の手料理、花子のキスマーク、高層ビルの影、太陽のエネルギー、石川さゆりの声、花の香、ピアノの音、エアガンの発射音、狐の化け物、亡き者の魂、コップの破片、石炭の灰、蝉の抜け殻など 仕事のストレス、安月給のうっぷん、帰郷の喜び、勉強の疲れ、酒の酔いなど	

表1のうち、形式クオリアは「ある物がどのようなタイプや種類に分類されるかということを示す属性のこと(小野2008:272)」であると説明されている。例えば、〈マグ

ロ〉は〈魚〉の一種であり、〈スズメ〉は〈鳥〉の一種であるといったようなことである。また、本稿では、記述されるものの上位概念だけでなく、その下位概念も形式クオリアに入れ、(1)の名詞句の形式クオリアを二種類に分けた。一つはNP_1がNP_2の上位カテゴリーを担うもので、もう一つはNP_1がNP_2の下位カテゴリーを担うものである。前者の例として「シェークのバニラ」「牛丼の並盛」「握りの特上」などがある。これらは「シェークの中のバニラ味であるもの」「牛丼の中の並盛であるもの」「握りの中の特上であるもの」といった意味に理解され、いずれもNP_2がNP_1の部分集合を構成する関係を表している。後者の例には、「チューリップの花」「松の木」「東京の町」が代表的で、いずれも「チューリップという花」「松という木」「東京という町」のように「NP_1というNP_2」に置き換えられるもので、NP_1がNP_2の部分集合または要素を示す関係にある。

次に、構成クオリアについては、「構成クオリアが表すのは、物体がどのような部分から成り立っているか、あるいは、どのような材料や材質から成り立っているかという属性である。また、Xという物自体が本来的に別の物Yの一部である場合にはそのYに関する情報が構成クオリアとなる(小野2005:26)」と述べられている。この説明から、(1)の名詞句の構成クオリアをNP_1とNP_2の包摂関係によって二つのタイプに分けることができる。一つは、NP_1がNP_2の材料、材質、内容、または構成部分を表すもので、それぞれ「わらの屋根、竹のお椀(材料、材質)」「花瓶の絵、結婚の話(内容)」「きのこの山、たたみの部屋(構成部分)」を代表例としている。もう一つは、NP_1がNP_2という部分を含めた全体を表すもので、「家の玄関」「研究室の窓」「大阪城の天守閣」などがその例である。

続いて、目的クオリアであるが、小野(2008:274－275)は、「目的クオリアは、あるものが何のために、どのように用いられるのかといった情報を表します。つまり、ものの本来的に意図された目的や機能が目的クオリアに当たります。」と説明している。例えば、〈薬〉は〈病気やケガ〉を治すために作られたものであり、〈墓〉は〈亡くなった人や動物〉を記念するために建てられたものであるといったようなことである。したがって、「風邪の薬」「太郎の墓」「とんかつのソース」などがこのクオリアに分類されるのである。また、「英語の教師」については、〈教師〉が何らかの〈科目〉を教えることを職業とする人を表すことから、〈科目〉の一種である〈英語〉を教えることをその人の「機能」として考えることができる。ちなみに、すべてのものに本来的な機能や目的があるわけではなく、人工的に作られたものと比べて自然に存在するものに目的や

機能を想定できないものが多い(小野2008:275)。このことは、表1の目的クオリアに自然物がNP_2を担う名詞句が殆ど見られない事実にも反映されている。

最後に、主体クオリアについて、「主体クオリアとは事物の起源や発生の要因についての基本的な情報である(小野2005:34)」と定義されている。例えば、〈キスマーク〉は特定の〈人間〉にキスされた後に残るあざであり、〈影〉は光が〈物〉に遮られてできる暗い部分であるといったようなことである。主体クオリアに分類される(1)の名詞句として、「花子のキスマーク」「高層ビルの影」のほかに、「彼女の手料理」「石川さゆりの声」「花の香」「狐の化け物」なども挙げられる。なお、「ピアノの音」という名詞句は、西山(2003)で典型的なタイプAとして挙げられているが、文脈を想定せずに「ピアノを弾くことによって生じる音」という意味解釈を持つことから、本稿では主体クオリアに分類した。

以上により、(1)に位置付けられる名詞句がどのような分類の中で成立しうるものであるのかを整理することができた。

6. おわりに

本稿では、文脈を想定せずに具体的な意味解釈を有する(1)に代表される名詞句「NP_1のNP_2」を西山(2003)の分類と比較する形で分析し、クオリア構造の観点から分類・記述した。

具体的には、まず数量詞による修飾を受けられるかどうかという飽和性テストを行うことで、(1)の名詞句の主名詞NP_2が飽和名詞であることを明確にした。次に、(1)の名詞句が文脈なしで有する具体的な意味解釈が主名詞NP_2の辞書的意味と百科事典的意味から生じるものであることを明らかにした。最後に、NP_1とNP_2との意味関係をクオリア構造の四つのクオリアのそれぞれに対応させて整理することで、(1)の名詞句を分類できることを示した。

しかし、今回NP_1が名詞句全体の解釈にいかなる影響を与えるかなどについて、触れることができなかった。また、本稿における分類結果と、本稿の議論の出発点となった(2)の分類との関係性についても、十分に述べることができなかった。これらはすべて今後の課題としたい。

注

1. 山泉(2013:12－13)は「名詞＋数量詞」の形を、Nishiyama(2016:651－652)は「数量詞＋の＋名詞」の形をそれぞれにテストに適用しているが、本稿では、両者の形を区別せずに同じ数量詞による修飾と考える。

2.「キスマーク」はこの解釈以外、「口紅を塗った女性がキスをしたために相手の人や物に唇の形に付いた口紅(『日本国語大辞典』第二版)」という解釈も持っている。両者は別の項目として辞書に登録されている。

3.「　」内の和訳は小野(2005)のPustejovsky(1995)からの引用である。英語の原文は「a set of properties or events associated with a lexical item which best explain what that word means」である。

4. この種の新しいクオリア構造の利用法にどのくらい理論的な妥当性があるかについては、さらなる検討を要するので、今後の課題とする。

5. 表1に示されている例は、先行諸研究から収集したものと国立国語研究所編(2004)を参考にして作ったものから成り立っている。

6. 丹羽(2010)は「順、概念、立場、資格」などがNP_2を担う場合はNP_1の補充が必須であり、「町、国」などがNP_2である場合はNP_1の補充が必須ではないとしているが、本稿では単純に前者を抽象名詞、後者を具体名詞と考えている。というのは、前者と後者はどちらも数量詞による修飾を受けることができる飽和名詞だからである。

7. 点線の名詞句は、NP_2が行為名詞(動名詞)であるため、(2)のタイプEと連続している。

8. 波線の名詞句は、「NP_1デアルNP_2」に換えられるため、(2)のタイプBと連続している。

参考文献

影山太郎(2005)「辞書的知識と語用論的知識—語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて—(特集:言語学と辞書)」影山太郎(編)『レキシコンフォーラム(1)』ひつじ書房, pp. 66 – 101.

国立国語研究所(編)(2004)『分類語彙表 増補改訂版』大日本図書.

増淵恒吉(1981)「読解指導」北原保雄他(編)『日本文法事典』有精堂, pp. 497 – 509.

西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』ひつじ書房.

西山佑司(2012)「第4章 語や句の曖昧性はどこからくるか」今井邦彦・西山佑司(2012)『ことばの意味とはなんだろう』岩波書店, pp. 89 – 143.

Nishiyama, Yuji. (2016)"18 Complement – taking nouns. "In Taro Kageyama, Hideki Kishimoto. (eds.) *Handbook of Japanese lexicon and word formation*. Berlin/Boston:De Gruyter Mouton, pp. 631 – 664.

丹羽哲也(2010)「連体助詞『の』の用法記述のために」『人文研究 大阪市立大学大学院文学研究科紀要』第61巻, pp. 81 – 111.

小野尚之(2005)『生成語彙意味論』くろしお出版.

小野尚之(2008)「チュートリアル クオリア構造入門」影山太郎(編)『レキシコンフォーラム(4)』ひつじ書房, pp. 265 – 290.

大島資生(1998)「現代日本語における「Xの」の諸相」『東京大学留学生センター紀要』 8号, pp. 43 – 69.

大島資生(2010)『日本語連体修飾節構造の研究』ひつじ書房.

Pustejovsky, James. (1995)*Generative Lexicon. Cambridge*. Massachusetts:MITPress.

小学館国語辞典編集部(編)(2003)『日本国語大辞典(第二版)』小学館.

鈴木康之(1978)「ノ格の名詞と名詞とのくみあわせ(1)」『教育国語』 55号, pp. 12 – 24.

鈴木康之(1979a)「ノ格の名詞と名詞とのくみあわせ(2)」『教育国語』 56号, pp. 66 – 84.

鈴木康之(1979b)「ノ格の名詞と名詞とのくみあわせ(3)」『教育国語』 58号, pp. 83 – 97.

鈴木康之(1979c)「ノ格の名詞と名詞とのくみあわせ(4)」『教育国語』 59号, pp. 67 – 81.

辻　幸夫(編)(2013)『新編認知言語学キーワード辞典』研究社.

山泉　実(2013)「非飽和名詞とそのパラメータの値」西山佑司(編)『名詞句の世界 その意味と解釈の神秘に迫る』ひつじ書房, pp. 11 – 27.

—東北大学大学院生—